

Hello

2003

7
No.233

friends

KANAGAWA
INTERNATIONAL
ASSOCIATION
NEWSLETTER

(財) 神奈川県国際交流協会 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷1-2-1 神奈川県立地球市民かながわプラザ 6F (35c) 1階 045-896-2626



特集

居場所

常に社会の中で自分の「居場所」を探し続け、時に社会に拒絶され、やっとここが「居場所」なのかと思って羽を休めて、ある日ふと感じる居心地の悪さ。私たちは、仮に「居場所」を見つけたとしても、新しい「居場所」を求めて、旅に出たくなる存在なのか。「居場所」とは常に守り続けると失われてしまうものなのか...

神奈川に暮らすオールドカマーの中には、様々なNGO活動や文化活動に取り組み続け、自らの「居場所」を守っている人がいる。一方ニューカマーの子どもの中には、日本で成長するにつれて、親子間のコミュニケーションが取りにく

くなったり、進学・就職の問題にぶつかり、自分の「居場所」を見失いそうになる人もいる。また、「居場所」を見つけようとしている人を支える人もいる。

世界では、グローバルに進む環境破壊や貧困、戦争や紛争で「居場所」を失う人がいる。「居場所」を失った人は、私たちの家のすぐ近くの路上にも、もしかすると私たちの家庭にも、隣にもいるかもしれない。そして私たちは...

この特集では、様々な活動に取り組んでいる3人を取材し、それぞれの「居場所」について聞くことを通して「居場所」とは何かを考える。

特集・居場所

横浜華僑青年会龍獅団 団長

唐 朱維

■「龍獅団」ホームページ <http://www.aurora.dti.ne.jp/~ryusidan/index.html>



あーすフェスタのステージの準備する唐さん(右端)

横浜中華学校の卒業生が中心となり結成された華僑青年団中国獅子舞の会「龍獅団」。30年以上の活動歴を持ち、団員は女性を含め約50名を有する。中国と日本にルーツを持ち、小学校の時代から、中国獅子舞に没頭し続ける唐朱維(とう・しゅい)さんはその団長である。現在は、華僑青年団の活動を主に、山中中華学校の小学生にも獅子舞を教えている。いちよう団地(横浜市泉区)のグループにも教えており、そこでは、中国の子、台湾の子、「中国帰国者」の子、ベトナム系の子、日本の子がまじって活動している。

2 003年5月11日、あーすぷらざで開催されたあーすフェスタかながわ2003のステージで、私は、初めて中国獅子舞を間近に見た。1.5m程の高さで片足がやっと乗るくらいの柱の上、獅子が舞い踊る。その時、獅子の仮面の下からちらりと覗いた、青年のいたずらっぽい笑顔が印象的だった。この笑顔を生み出すことができる彼らの「居場所」は、どんな場所なのだろうか。

スポットライトの中で…

唐さんは、獅子舞の楽しさをまずこう語った。

「獅子舞はいやでも人の眼につくところで行いますよね。やっぱり今の人にとっては、獅子舞をやることで、普段の自分じゃない自分を出せるから、喜んで積極的に参加するっていうところもあると思うんですね。なかなか普通の人って、スポットライトをあびたりするような機会がないですよ。それがやっぱり楽しいんじゃないかな。少しでも面白そうだなって思った人は、一度体験するとやみつきになっちゃうと思いますよ。」

中国獅子舞は、楽隊と踊りの二つの役割があるが、その役割分担はどのようにして決まるのだろうか。

「基本的には、全員が楽隊と踊りの両方もできるようにします。ただ適材適所がありますから、リズム感のいい子は楽隊、運動神経のいい子は踊り手に回ります。」

「居場所」というのは、誰でも同じようにいられる場所ではない。その人がどのように生きるのがいいのか考える場所なのだろう。それぞれ子どもたちの役割を考えると、唐さんに迷いはないのだろうか。

「あくまでも本人の意思を尊重するだけ。好きなことをどんどんさせる。しかし、活動を続けていると一番良いものを作り上げたいという気になる。そうすると、どうしてもよくできる子を選んでいくことになる。でも一方で、取り組む姿勢も大切にしたい。本当に熱心に、地道に毎回毎回練習に出ているような子を出したりします。」

そこには、演出家と育成者という二つの役割を持つリーダーの目があった。

コミュニケーション

唐さんが活動の中で充実感を得る瞬間はいつなのだろうか。

「大きなイベントが終わった後ですね。終わったら必ずコミュニケーションのため、一緒に食事をすることにしています。話し合う内容は、普通の日本の子と変わらないですよ。携帯電話をいじくりまわしたり(笑)、難しい話はしないです。スニーカーはどれがいいんだとか、そんな話ばかりですよ(笑)。相談を受けたりもしますけど、そんなに難しい相談はないですよ。アルバイトしたいんだけど、どの辺が稼げるかとか…(笑)。」

コミュニケーションをとる中で、いろいろな相談を受けることもあるようだ。

「高校生は自分で進学進級を考えても、後になって違う選択しておけばよかったなと思うことが結構あるじゃないですか。だから、例えば高校3年生になったら、できるだけどういう方面にいきたいか聞いて、こういう選択があるよといったアドバイスはします。就職する子には、僕の友人には中華料理関係の仕事に就いてる人が多いので、お店を紹介したりということはあります。」

子どもたちの迷いも共有する。

「民族的意識をめぐって戸惑ったりというのじゃなくて、本当に今の若い子と同じです。例えば『出席日数が足りなくなってるやばいやばい』とか(笑)、それくらいですね。今、僕らが教えてる子たちは(在日の)3代目、4代目なので、感覚的にはほとんど日本人と変わらない。それは僕の世代とは違いますね。僕なんかの頃に比べると、中華学校自体が昔ほど民族教育を全面に押し出してはいないんですよ。僕なんかの頃は、政治的な背景もいろいろあって、民族色を強く打ち出していたんですけど、今は政治色の強い授業はないですから。」

唐さんは、世代の違いをしなやかに受け止めて、子どもたちの「居場所」を作り出しているように感じた。

サポート

家庭も密かに(?)サポートしているようだ。

「大きなお祭りのときは、親御さんたちも見に来ますよ。でも高校生くらいのときってというのは、あんまり親に来てもらいたくない。『ウザいから来ないでくれ』っていうのあるじゃないですか(笑)。でも親の人は、みんな隅の方で見てたりしますね(笑)。僕が高校生くらいのときもそうでした。」

中華街での春節・国慶節などの大きなイベントのときには、地域のサポートもある。40代、50代の人たちが交通整理などの裏方をしているそうだ。団員と家庭、地域の協力体制が自然と形作られているのだろう。

ずっとそこにあり、これからもそこにあるもの

獅子舞がなかったら何をしますか、という問いに、「何してますかね? 考えたことないです。僕の中では獅子舞はかなりの部分を占めていますから…」と答える唐さん。獅子舞の意義について、最後にこう語った。

「中国獅子舞は、厄を払って幸福を招き入れるというものです。みんなの心のよりどころを作り、縁起のいいもの、幸運をばらまく踊りです。だから実際、中華街でやるときは、ただ踊ってるだけじゃなくて、みんな“いいもの” “幸運” をもらってるという意識を持ってる。正月の頃には、お店を一軒一軒回るんですが、お店の人たちからすると、今年も一年、商売繁盛がこれで来るっていう想いを持ってもらえる。中華街の住民からすると(日本で生まれ育った人たちです)、やっぱり自分の文化は中国にあると思っている。その文化のルーツである獅子舞で、厄を落とせることはうれしいことじゃないでしょうか。」

中華街の獅子は、これからも様々な思いが重なる「居場所」を守り続けていくのだろう。(聞き手F)

特集・居場所

多文化まちづくり工房 代表



早川 秀樹

■「多文化まちづくり工房」ホームページ <http://www.kurumi.sakura.ne.jp/~kobo>

早川秀樹さんは、大学1年からサークル活動で日本語教室を開始。その後活動拠点をいちょう団地へ移し、2000年1月「多文化まちづくり工房」を設立した。そこでは、外国籍の中高校生を対象とした日本語教室、学習補習教室を開催している。2003年4月には中田宏横浜市長との市民対話昼食会「カレーランチミーティング」に91倍の応募を突破し参加。多文化共生について語り合った。

←事務所に来た、ベトナムにルーツを持つ高校生に撮影してもらった。事務所の中が明るい「居場所」になる。

外 国籍の中高生やボランティアの「居場所」になっているという「多文化まちづくり工房」。手作り感覚がいっぱいで、テーブルに飾られた一輪の深紅のバラが印象的な事務所で話を聞いた。

諦めきれなくて…

ここに集まる子どもたちは希望した、高校に行けるのだろうか。子どもたちの進学状況を聞いた。

「おれの感触では、半分を超えるぐらいですかねえ。いずれにしても高くない。去年などは、進学を諦める子が多かったですね。みんな行きたいとは思ってるんだけど、日本語の能力や学力が伸びなくて、自分で諦めている。高校に行っても何も変わらないと思ってる子たちも、けっこう多いですね。それだったら、今から仕事して、お金貯めちゃった方がいいじゃないかという感じがありますね。家の事情が苦しくて、経済的な理由で諦める子もけっこういます。」

子どもたちが進学を諦める瞬間、早川さんはどんな気持ちになるのだろうか。

「“がっくり”っていうか、そのこと自体に“がっくり”っていうわけではなくて…。おれのところに伝えにくくるときには、もう本人が決めてるだろうから、その結果に対してどうこうということではないけど、そうさせてしまった、そうなる前に何かできなかったかなって考えてしまう…。ほかにやりたいことがあるから、高校に行かないでこっちを選んだっていう選択だったらいんだけど…。結局、諦めて、ほかに選択肢がないから仕事につくってという形の選択になっていくので…。それでも本人も考えた末の結果だから…。けっこう、おれも諦めきれなくて、話をしたりするんだけど、難しい。」

子どもの意思を尊重しながら、自分に何かできることはなかったのか、早川さんは考え続ける。

大道芸のクラウン(道化師)

自分をどんな人だと思うか、という問いに、「クラウンかな…」と早川さんは答えた。

クラウン(道化師)は早川さんにとって、“役に立たない”ものの“象徴”らしい。「何年かしてみると、子どもは思っているよりもしっかりしていて、自分でちゃんと道を見つけて来る。自分にできることなんかほとんどないですね…。自分が何かやってあげたとしても、“役に立つ”“役に立たない”で言えば“役に立たない”のかなと思う。自分たちで道を見つけていくのを、横で見ているだけでいいと思ってる。」と言う。

さらに、教室を運営することは“大道芸”に近いと感じるそうだ。大道芸人が道路の一角に、周囲と一緒に自分の空間を作っていくことと、「多文化まちづくり工房」の運営との間に、共通点を見出している。

“大道芸”が作り出す空間には、その時、その場限りという“はかなさ”も共存するよう感じるが、と問うと、

「何も残らないからいいんじゃないですかね。形がないところで形を一瞬作って、また形を消して…おれは、そういうのが一番いいかなって思うんですけどね…。この活動も大道芸の一部だと思いたいですね、根底にはそういう想いを持ちたいと思う。」と早川さんは答えた。

よりそうことは楽しい

子どもたちを横で見ていることは“役に立たない”ことなのだろうか。早川さんはこう言う。

「子どもたちの横にいて、子どもたちを見るのは楽しいし、ここに10時ころまでいて、ここに来る子どもたちの話を聞くのが好きだし、おれが話をするのも好き。“役に立つ”ことを沢山している人から見ると、“役に立たない”ことばかりやってることになるかもしれないけど…」

人と人が楽しみながらよりそった時、そこに「居場所」が現われるように感じた。

「居場所」を作る

早川さんは、「居場所」を作る知恵をこう語った。

「不定期で短い期間で来る学生と、長期で関わって安定感のある人とを、どういふ

に掛け合わせて場を作っていくかが大切。」

さらに、早川さんは、「ここで何かやって、それを持ってどこかに行ってみたい。外に出て、そこで得たものを、またこちらに伝えてくれたりする方がいい。」と続ける。

「居場所」を作るには、長く継続して関わるボランティアが望ましい、と思っていた私には新鮮な発想だった。

一方で、長く続けられるボランティアについては、

「活動が安定したら、ある程度コーディネートに関わってもらい、活動の軸になってもらう。」と言う。

活動の軸になる部分と、入れ替わる部分が上手にかみ合うことが必要なのだ。紆余曲折を経てたどり着いた、早川さんの「居場所」作りの手法なのだろう。

なんでここにいるんだろう？

早川さんに、あえて、なぜここにいるのか、尋ねてみた。

「よく訊かれるけど、一番答えにくい質問ですね。ただ、おれもここに「居場所」がありますね。ここにしかないというか、ここをなくしたらおれもやっていけないし…」

自分の力で作った「居場所」は、早川さんにとって、かけがえのないものなのだ。ところで、早川さんは、どういう場所がいい「居場所」と考えるのだろうか。

「子どもにも聞かれたことがありますけどね。『居場所って何?』って。難しいですね。」ここには、子どもとそんな会話ができる「居場所」がある。(聞き手F)



「多文化まちづくり工房」の事務所。学習参考書も沢山ある。

特集・居場所

映画『ヒバクシャ—世界の終わりに—』撮影者・川崎水曜パトロールの会 メンバー

岩田 まき子

■『ヒバクシャ—世界の終わりに—』ホームページ <http://www.g-gendai.co.jp/hibakusha/index.html>■『川崎水曜パトロールの会』ホームページ <http://homepage3.nifty.com/kawasakisuiipato>

ハンフォード(米国)で取材中の岩田さん

原爆、核実験、原発、劣化ウラン弾の被害者を等しくヒバクシャと呼び、その声を収めた映画『ヒバクシャ—世界の終わりに—』。撮影担当の岩田まき子さんは、監督とともに長崎・広島・バスラ(イラク)・ハンフォード(米国)のヒバクシャに出会い、彼らの姿をカメラに収めた。岩田さんは、野宿者を支援する『川崎水曜パトロールの会』メンバーでもある。

世

界と路地裏を行き来する岩田さん。いろいろな場所で様々な人を見てきた岩田さんは、「居場所」についてどのように考えているのか話を聞いた。

私たちの世界の姿

米国で出会ったヒバクシャについて岩田さんはこう語った。

「ハンフォードの人は、ガンになっているけれども、自分が放射能によってガンになっているとは思わない。被曝って感覚がない。日本と本当に違うと思って愕然としました。」

イラクはどうなのだろうか。

「バスラにある内科病棟は、内科なんだけれどもガン患者ばかりで、先生が言うには、同時に2箇所が発生するダブル・ガン(double cancer)は、ほとんど日本では見られないんだけど、そういう人が一つの病院に8人いたんですよ。びっくりする症状が、今出始めているんだって言ってました。そこに輪をかけたみたいに、経済制裁で薬がなくて、みんな死んでいく。」

これが私たちが暮らす世界の姿なのだ。

大きな「居場所」

環境を含めた大きな意味での「居場所」について岩田さんはこう言う。

「意識していないけれども、環境はどんどん人間には悪くなっていく。本当に大きい意味での「居場所」がなくなって、人類は死に絶えるかもしれない。映画を作ったら、そういう大きい話になっちゃったのよね。」

私たちの日々の生活の中で、その「居場所」は大きすぎて見えにくい。

映画のラストに使うため、岩田さんは、原子燃料サイクル施設のある六ヶ所村の撮影に行った。彼女はその感想をこう言う。

「古くからの農村の中にある、核施設の関係者が暮らす新しい街は、「書割」(映画のセット・舞台の背景)みたいだった。」

“絵になる”と“書割”の違い

その六ヶ所村で、岩田さんは、古くから地域に根ざしている人たちの“ほっかむり”姿を見て、“どっしり”としていて、“絵になる”

と感じた。岩田さんにとって、“絵になる”ということは、“存在感がある”ということでもあるらしい。

「“存在感”がある人っていうのは、地に足がついている感じがするんだよね。幸せか不幸かっていうのは関係ない。野宿の“おっちゃんたち”も、私にはすごい“存在感”があるな。信念あるもん。『なんでここにいるんだ』と話を聞くと、『わかるなぁ』っていう人がけっこういる。」

「幸せか不幸かっていうのは関係ない」という言葉を耳に残しながら、大都市という“書割”の中に暮らす私は、「なんでここにいるんだ」という問いに、答えられるだろうかと思った。

川崎の街を歩くこと

「大きい核被害があっても、一人一人が受けている被害は違うし、一人がどうやって生きて、何を食べて、何を考えて、どうしているのか、ってところに興味がある。」と語る岩田さんは、「川崎水曜パトロールの会」で野宿者の支援活動もしている。そこに岩田さんの「居場所」はあるか訊いた。

「撮影がある間は行けないけれど、(過剰な)期待もされないが、拒否もされないのもまた戻れる。そういう場所っていいなと思います。世の中の大きなものに縛られない、そういうものから出た“ホッとするもの”があるから、多分行っているのだと思う。そんなこと言うとみんなに怒られそうだけど…(笑)。家がある／ないで分けたら、家を捨てることで得る生き方もあるんだろうなって思う。家のある世界、家を持っている世界に生きている人たちが、もしかしたら人間的じゃないのかもしれない。こんなこと言うと怒られるかもね(笑)。ふつうに毎月家賃を払っていることに、疑問を持たないものね。そのためだけに働いているような人もいっぱいいるし。土地が誰のものかっていうのも大きい問題だよな(笑)。」

子どもと「居場所」

岩田さんは、「居場所」についてこう言う。「人と一緒に居られて、安心できるような場

所が「居場所」なのかな。そしてそういう「居場所」が、すごく少なくなっていると感じる。フリースクールで、学校に行かない／行けない子どもをテーマにした仕事もしてるんですけども…少し前くらいから、いじめだとか、子どもの世界の中で、子どもが本当に居場所を失ってて、人を傷つけたりっていうのが目についてきた。ひところ「子どもの居場所」のことが言われていたときがあったけれども、世の中が住みにくくなると同時に、子どももすごく住みにくくなって、家にも居られない、学校にも行けなくなる。どんどんどんどん、あふれていく感じが、すごく目に見えた気がした。」

「川崎水曜パトロールの会」でも、試験や入試の時期になると、子どもによる野宿者への襲撃に気をつけよう、という話題が出るそう。そこにも「居場所」がない!と叫んでいる子どもたちがいる、と岩田さんは思う。

「野宿の人が安心して居られる場所は、子どもたちにも、私にも、安心して居られる場所だ。そういう場所を見つけない。」と思いつつ活動する岩田さんだが、「居場所」がない人に、「居場所」を与えたいと思うか訊くと、答えはこうだった。

「居場所」は他人からはあげられない。」

「誰と出会っても、どんな風に出会っても、ちゃんとつき合えば、それなりのものは撮れるんじゃないかな。」と思う撮影者の目は、ちょっぴり厳しい。(聞き手F)



インタビュー中の鎌仲監督(中央)と岩田さん

『ヒバクシャ—世界の終わりに—』

[1時間56分/監督:鎌仲ひとみ/制作:グループ現代]
上映スケジュールはホームページ参照のこと。

◎問合せ:グループ現代

TEL:03-3341-2863 FAX:03-3341-2874

夏休みの講座

地球市民学習リーダーセミナー「まなびの道具箱」

夏休み期間中の「まなびの道具箱」は、「教材コーナー」(下段参照)の学習教材をご紹介します。

第2回「自然と環境のファイル」を使った環境学習～スウェーデンの女の子ロッパンの生活から～

スウェーデンの多くの小学校で使われている教科書「自然と環境のファイル」は、子どもたちが自分で調べたり考えたりする作業を通して、環境について学ぶ教材です。この教材を翻訳・発行した「かながわ環境教育研究会」の渡辺さんに、教材のこと、スウェーデンの取り組み、環境学習の進め方等をお話いただき、「自然と環境のファイル」を利用した学習プログラムを皆さんと一緒に作成します。

- 日時:7月29日(火) 13:30～16:30
- 講師:渡辺敦さん(かながわ環境教育研究会・代表)
- 教材の対象学年:小学校4年生～中学生向き

第3回一杯のコーヒーから考える世界の貿易

「いい貿易って何だろう～一杯のコーヒーから考える世界の貿易」は、身近なコーヒーを題材に、「南」の生産国の現状と世界の流通を理解し、世界貿易の問題点について考えることをねらいとした開発教育教材です。実際にワークショップを体験しながら、この教材の制作者の一人である陶山さんとともに、中学校や高校の授業の進め方を考えます。

- 日時:8月22日(金) 13:30～16:30
- 講師:陶山明彦さん(新潟県立新発田農業高校教員)
- 教材の対象学年:中学生以上向き

【共通事項】

- 場所:あーすぷらざ 1階 会議室
- 対象・定員:教育関係者、NGO関係者ほか地球市民学習の実践に関心がある方
- 定員:30名(申込先着順)
- 参加費:無料
- 申込期間:7月8日(火)より受付
- 申込方法:(1)参加する回、(2)氏名(ふりがな)、(3)所属(学校名や団体名)、(4)連絡先(電話、FAX、Eメール)、(5)参加動機をすべて明記して、電話/FAX/E-mailでお申し込みください。参加いただけない場合のみ、こちらから連絡いたします。
- 申込先:企画情報課
TEL:045-896-2896
FAX:045-896-2945
E-mail: kikaku@k-i-a.or.jp

夏休み子ども英会話講座

受講者募集

神奈川県国際交流協会では、英語をツールとして、世界の様々な文化や人々について学びきっかけを子どもに持たせることを目標に、夏休みに子ども向け英会話講座を開講します。

- 講師:清水弥生さん(現在春期英会話講座基礎クラス講師)

Destiny Ishiharaさん(横浜市国際理解教師)

●日時

Aコース

7月29日(火)～8月1日(金) 午前10:00～12:00

Bコース

8月19日(火)～8月22日(金) 午前10:00～12:00

- 場所:あーすぷらざ 1階研修室B及び料理室

- 対象・定員:小学校1～3年生 各コース20名程度

- 内容(予定)

Aコーステーマ:七大陸

子どもが多文化に触れるための基礎として「世界」を認識する。七大陸のパズル作りなど行う。

Bコーステーマ:米

米料理を通して、世界の食文化に目を向ける。米料理についてのミニブック作りなどを行う。

- 料金(A、Bコースとも同料金)

会員:7,000円(税込み7,350円)

一般:8,500円(税込み8,925円)

- 申込締切

Aコース:7月22日(火)、Bコース:8月12日(火)

- 問合せ・申込み:国際協力課

TEL:045-896-2626 FAX:045-896-2945

あーすぷらざ2F情報フォーラムに「教材コーナー」ができます!

7月オープン!

地球市民学習教材

学校の総合学習等で利用できる地球市民学習のキット教材やビデオ、参考図書を手にとってご覧いただけます。「国際理解」「環境」「人権」「平和」「情報」教育の教材、約500点を展示。これから海外教材も追加していく予定です。

日本語指導教材

国際教室などの現場で実際に指導されている先生方を選んでいただいた教材約60点を新たに集め(<http://www.k-i-a.or.jp/materials>で情報を見られます)、(1)外国人児童生徒の受け入れに関するもの、(2)カリキュラムに関するもの、(3)教材、(4)教具・辞典、(5)コンピュータ・ソフト、(6)学校

用語対訳集などの分野別に整理しました。いままでに協会が収集した教材と併せて約200点の教材を閲覧できます。

- ご利用いただける日時

火～金曜日 9:00～20:00

土・日・祝日 9:00～17:00

(祝日以外の月曜日および年末年始は休み)

- 資料の閲覧等

・来館者は、教材を情報フォーラム内で閲覧することができます。原則として貸出は行いません。

・コピー不可の資料を除き、教材は、著作権法の定める範囲内で複写することができます。

- 教材・資料ご寄贈のお願い

神奈川県国際交流協会では、地球市民学



習に関する教材・活動案、実践報告書、視覚教材、参考図書などを収集しています。ご寄贈いただけます教材がありましたら、是非ご協力ください。

- 問合せ:企画情報課

TEL:045-896-2896

E-mail:kikaku@k-i-a.or.jp

掲示板

♪夏休み子ども地球市民クラブ2003♪ ～いろんな楽器でアンサンブル～

学校の音楽の時間には登場しない、世界の様々な楽器を演奏したり、作ったりしてみませんか。「えっ、こんなものを使って楽器が作れるの?」「太鼓って気持ちいい!」などなど、きっといろいろな発見があるはずですよ。

●日時：(1)7月25日(金)、(2)7月26日(土)、(3)7月29日(火)

各日13:30～16:30(開始30分前開場)

●場所：(1) **あーだ 355** 3階企画展示室、(2)(3) **あーだ 355** 2階プラザホール

●対象：小学校3年生～中学校3年生

●定員：各回約30名(家族の見学可)

●参加費：無料((1)(3)は材料費500円)

●内容

(1)「おもしろ笛をつくろう!」

・竹の鳥笛(インドネシア)づくり
・フィルムケースの鳥笛、豚鼻笛など
・講師によるミニコンサートなど

(2)「心をあわせてサムルノリ」

・韓国・朝鮮の楽器チャングをたたこう
・講師陣によるサムルノリの模範演奏
・ハングル文字の名前カードづくりなど

(3)「太鼓をたたこう!」

・アジアやアフリカの楽器紹介
・西アフリカのジャンベをたたいてリズムアンサンブル
・ひょうたんで楽器をつくろう など

●問合せ・申込先：地球市民学習課

TEL:045-896-2899

食と暮らしの体験セミナー(第2回)

「食」とおとして、子どもたちに世界の様々な土地の暮らしや風土を紹介しています。家庭料理体験と会食のあと、遊びや工作、踊りなどの体験プログラムや質問コーナーなどがあります。

●日時：7月13日(日)

●場所：**あーだ 355** 1階料理室他

●内容：「夏祭り」をテーマに、日本の食と文化に触れます。料理は、巻き寿司やお吸い物、和菓子などを予定。ゆかたの試着や風鈴作り、ゲーム大会



などもあります(内容が変わることもありますのでご了承ください)

●定員：約25名

●対象：小学生以上(親子参加も可)※外国籍の方の参加大歓迎。※成人のみでのお申込はご遠慮ください

●参加費：食料費800円程度

●協力：かながわ子どもひろば、ユッカの会

●問合せ・申込先：地球市民学習課

TEL:045-896-2899

国連に関するポスター・作文、主張をお待ちしています。

神奈川県国際交流協会(日本国際連合協会神奈川県本部)では、国際連合の意義を普及させることを目的として、本年度もポスター・作文コンテスト、高校生の主張コンクール神奈川県大会を開催します。概要は以下の通りです。たくさんの方からのご応募をお待ちしています。

■ポスターコンテスト■

●対象：小学生以上

※年齢ごとに4つのグループに分けて審査します。

●テーマ：「私たちが拓く未来の国際連合」(国際連合の意義)

●応募締切：9月8日(月)

■全国中学生作文コンテスト■

●対象：中学生

●テーマ：「私たちが拓く未来の国際連合」「国連に望むこと」「日本と国連」のいずれか

●応募締切：9月8日(月)

■高校生の主張コンクール■

●対象：高等学校生徒(全日制、定時制、通信制)、高等専門学校生徒(3年生まで)

●テーマ：「私たちが拓く未来の国際連合」「国連に望むこと」のいずれか

●応募締切：9月15日(月)

●特記事項：審査員5名を協会会員の方から募集中です。詳細はお電話でお問い合わせください。

●応募方法：各学校、国連地域組織に置いてある実施要項を見るか、お電話でお問い合わせください。

●問合せ：国際協力課 TEL:045-896-2964

●神奈川県国際交流協会(KIA)は—地球のすべての人が、国境や人種、文化の違いを越えて、人間らしく暮らせる社会の実現のため、人と人とのつながりを大切に「国際交流」「国際協力」を推進するさまざまな事業を展開しています。

●あなたも会員になりませんか?

★学生会員制度もスタート!

協会の活動を支える会員を募集しています。会員になると

- ①協会が主催する各種催しや国際交流団体、NGOの催し情報、ボランティア情報を掲載した「HelloFriends」「サラダボウル」をお送りします。
- ②当協会の出版物の割引サービスが受けられます。
- ③会員の方を対象にした催しへご招待します。
- ④「エスニック・レストラン・マップ」をお送りします。
- ⑤会員証の提示で、提携エスニック・レストランの優待サービスが受けられます。
- ⑥ **あーだ 355** のレストラン「メルヘン」でお食事の場合、会員証の提示で、コーヒー、紅茶、グラスワイン、ソフトドリンクの一品サービスが受けられます。
- ⑦ **あーだ 355** ショップ「ベルダ」で2,000円以上(税別)購入の場合、会員証の提示で10%割引が受けられます。

年会費：一	般	3,000円から
	学	生 1,500円から
	団	体 10,000円から

*会員登録をご希望の方は、協会までお問い合わせください。振込用紙など関係資料をお送りします。

★当協会は、2003年4月より、**あーだ 355** の施設運営を含めた全事業を神奈川県から受託しました。



このほか、神奈川県国際研修センターと神奈川県国際学生会館を運営しています。

Hello friends

2003年7月1日発行
第233号

発行/財団法人 神奈川県国際交流協会
〒247-0007
横浜市栄区小菅ケ谷一丁目2番1号
神奈川県立地球市民かながわプラザ1階
045-896-2626 FAX.045-896-2945
URL:http://www.k-i-a.or.jp
E-mail:kikaku@k-i-a.or.jp
印刷/吾妻印刷株式会社

「居場所」という特集にあたり、シルヴァスタインの「ほくを探しに」「ピック・オートの出会い」「おおきな木」という絵本を手にした。この三冊は、「居場所」を考えるにあたり大きな示唆を与えてくれた。もちろんそれ以上に大きな存在は、長時間つきあってくださった三人の方々である。

■本の中に、登場する場面や言葉が、三人の方々の経験や言葉と重なったり離れたりのしながら、特集のイメージを作り上げていった。

■私は、取材を始める前実はどこにも「居場所」はないのではないかと思ったりもしていた。だからこの特集は、自分自身の「居場所」を考えることにもつながった。

■今、私なりに考える「居場所」とは、やはり「どこにもない場所」である。それは、人と人が出会うとき瞬間的に生まれ、消えていく場所なのではないだろうか。

■子どもたちより少し長く生きていく私にとっても難問である「居場所」。写真集「どこにもない場所」(橋口謙一著・集英社・85年)を私が高校生の時に手にしたのは偶然ではない。若者は、必ずこの問題にぶつかると。外国籍の若者ならば、なおさら深く考えるのではないだろうか。

■成長するにつれて、「居場所」という難問に真剣にぶつかるとき、同じ問いを共有できる仲間がいることが一番大切なことだと思ふ。

(企画情報課 藤本)

キャラバン・サライ

※キャラバン・サライとは、かつてシルクロードにあった隣国宿。文化・情報の中継点となっていました。協会職員からのメッセージ発信の場となるよう名付けました。